

今後の広島における平和教育の可能性についての一考察

—「キリスト教主義大学ジョイント8.6平和学習プログラム」
15年の振り返りをもとに—

前 田 美和子*

(2014年11月12日 受理)

A Study on Potential of Peace Learning in Hiroshima Hereafter With 15 Years of the Review of the “Christian Universities Joint 8.6 Peace Study Program”

Miwako MAEDA*

Hiroshima Jogakuin religion part, has implemented a “Christian University joint 8.6 peace education program” from 2000, the year of 2014 was held in the 15th.

This program, is operated by around the student in Hiroshima Jogakuin, has expanded the peace learning by incorporating a variety of programs is not only exposure testimony but also reading drama about the atomic bomb, monument tour, and group discussions.

And that a result, learning effect can be seen that there is consciousness change in the participants.

In this paper, based on looking back 15 years of History and the voice of this year’s participants, we discuss the possibility of peace learning to be expanded in the future.

Keywords: Hiroshima ヒロシマ, peace learning 平和学習, Study of Christian Education キリスト教教育

1. はじめに

国際平和文化都市として自らを位置づける広島において発信され、あるいは行われてきた平和教育が危機を迎えていることは、従前より指摘されてきた。

第一には、学校教育における平和教育への取り組みからの後退である。2004年に広島平和教育研究所が行った「平和教育実態調査」¹⁾によれば、広島県内の公立小・中学校862校(分校も含む)のうち、平和教育に関する年間カリキュラムを作成している学校は、23.7%に留まっており、同趣旨の前回調査(1997年実施)における95%に比して、わずか四分の一に激減している。これは、学校内に平和教育を推進する組織が無くなったことに関係しており、1998年に文部省(当時)が行った是正指導に起因していると、同調査は結論付けている。

第二には、平和教育としての原爆教育²⁾の重要な部分である被爆証言が迎えている危機である。2014年3月に

広島県と広島市、長崎県と長崎市がそれぞれ管理する被爆者健康手帳所持者(在外被爆者を含む)の速報値をまとめたところ、19万5241人となり、戦後初めて20万人を割ったことが分かった²⁾。このことは、被爆証言者の高齢化や逝去による減少を意味している。

第三には、被爆証言を受け止める側の意識の変化である。2014年5月には、長崎市を訪れた横浜市の公立中学校3年生の男子生徒らが、被爆証言者に対して暴言を吐くという衝撃的な事件があった。このことは、単に被爆証言を聴く者のマナーの問題にとどまらず、現代におけるコミュニケーション文化の変容に平和教育がどのように向き合うかという問題提起をはらんでいる出来事といえよう。

広島女学院大学において15年にわたって行われてきた「キリスト教主義大学ジョイント8.6平和学習プログラム」(以下「8.6平和学習プログラム」とする)も、広島における平和教育の試みとして、同様の危機あるいは転換点を避けることはできないであろう。

* 広島女学院大学人間生活学部幼児教育心理学科専任講師

本稿においては、8.6平和学習プログラムの15年を振り返るとともに、これらの危機あるいは転換点に際して、とくに上述の第二および第三の危機に関連し、今後の平和教育のありかたについて、その可能性を展望してみたい。

2. 「キリスト教主義大学ジョイント 8.6平和学習プログラム」について

本プログラムは2000年に始まり、2014年に15年目の節目を迎えた。本項では8.6平和学習プログラムのこれまでの歴史を顧みることとする。

(1) プログラム開催の経緯

8.6平和学習プログラムは先述のとおり、戦後55年たった2000年より始められたプログラムである。

2000年の第1回開催にあたり、各大学へあてた案内の中からその開催趣旨を紐解いてみよう。「参加学生の皆さんには、『広島女学院原爆慰霊式』に参加することで、戦時下のキリスト教主義学校の苦難を知るとともに、原爆の被害にあった広島女学院生徒・教職員の慰霊を通して、平和社会実現に向けての担い手としての自覚を促していただきたいと思っています。原爆資料館見学、平和公園碑めぐりを通して被爆の実相を知るとともに、在韓被爆者の方から『証言』を聞くことで、被爆の後遺症やトラウマへの理解を深めてもらいたいと思います。在外被爆者をめぐる諸問題を理解するだけでなく、『在韓被爆者渡日治療』の運動を物心ともに支えてきている『ムンファの会』の若者との交流を通して、ボランティア活動の大切さを心に受けとめてもらえれば幸いです。また、8月6日8時15分には『ダイ・イン』に参加し、『8・6平和のつどい』でヒロシマのメッセージを聞き、『広島湾スタディ・クルージング』では戦争遺跡や軍事施設を実際に見ることで、21世紀の社会がどうあるべきなのかを考えてもらいたいと願っています」。

このプログラムを始めた、広島女学院大学学長（当時）の西垣二一は、かつて、このプログラムの開催について「ヒロシマに来て、ヒロシマを肌で感じて欲しいと思った」と論者に話されたことがある。8月6日当日の朝8時から8時半までNHKによって全国放送される「広島平和祈念式典」（以下「式典」）の生中継では視聴者に厳粛で重々しい式典の様子が映し出される。しかし実際に式典会場に足を運んでみると、生中継とはまったく異なった光景に出会うことになる。平和記念公園内には憲法9条改憲問題や原発問題について、それぞれ異なった立場の意見をメガホンで叫ぶ団体や、昨年からは在日外国人を差別する絶叫調のヘイトスピーチも目立つように

なった。公園内には多種多様な主張をする団体が全国から集まり、声高にそれぞれの主張を叫び、さらには公演周辺では騒々しいデモが行われているのである。機動隊は公園入口にいかめしい列をつくり、物々しささえ感じさせる。しかしこういった情景は決してテレビで報道されることはない。公園内を足早に通り返る通勤や通学の人々の姿も映しだされることはない。8.6平和学習プログラムに参加し、初めて8月6日の朝を広島で迎えた学生たちからも毎年、このような情景に対する驚きの声を聞く。この例からも、現場に足を運んでこそ伝わるもの、理解できるものがあることは間違いない。

(2) 2014年度実施内容

現在8.6平和学習プログラムは、広島女学院大学の学生によって組織された実行委員が主体となって運営されている。2014年度に実施されたプログラムは以下の通りである。

まず初日である8月5日は開会礼拝に始まり、実行委員による朗読劇『夏雲は忘れない』の公演とピーススタディーツアーの報告、日本キリスト教団教師であり広島女学院大学とも関係の深い木村弘美氏による被爆証言を学内で行った後、平和記念資料館や碑めぐりを行った。本年の碑めぐりではマルセル・ジュノー博士記念碑、峠三吉詩碑、広島平和都市記念碑、レストハウス、原爆の子の像、慈善時被爆墓石、韓国人被爆犠牲者慰霊碑、原爆供養塔、原爆ドームをそれぞれ実行委員の解説のもとまわった。その後、本川小学校慰霊祭参加し、夕食は広島女学院大学の澤村雅史チャプレンより広島のお好み焼きの歴史と戦争との関係をうかがいながらお好み焼きを食した。

6日は8時前に原爆ドーム前に集合し、平和祈念式典の見学グループと原爆ドームでダイ・インを行うグループとに分かれ8時15分を迎えた。その後再び合流して「原爆の子の像」に折り鶴を献納し、広島女学院平和記念礼拝に出席して午前のプログラムを終えた。午後からは6つのグループに分かれ、5時間半にわたってグループディスカッションを行った。その後再び平和記念公園へ赴き、元安橋付近で「小さな祈りの影絵展」^{註1)}ととうろう流しを見学した。

最終日の7日は9時より昨日のグループディスカッションをポスターにまとめたポスターセッションを行い、その後閉会礼拝をもって閉会した。

このように本プログラムは、参加者が、被爆証言の他、碑めぐりを通して、あるいは8月6日の朝を原爆ドーム付近で過ごすことによって、西垣の言う「ヒロシマを肌で感じる」体験を強烈な印象と共に味わうことを願って計画・準備されている。

また、本プログラムの特色はキリスト教主義にもとづいておこなわれている点である。開会礼拝や閉会礼拝や、キリスト教の追悼礼拝のかたち行われる「広島女学院平和祈念式典」は、他の同様の平和学習から本プログラムを際立たせている特長である。

(3) 8.6 平和学習プログラムの内容の変化

これまでの8.6 平和学習プログラムの参加者数と参加大学数は表1の通りある(表1)。

それぞれの年の主な特徴、プログラム内容は、以下のよう大きく変化している。

第1回(2000年)は5日～7日の2泊3日で行われた。平和記念資料館見学、平和記念公園内の碑めぐり、6日8時15分のダイ・イン、広島女学院平和祈念式典参加、被爆証言はこの当時から行われている。一方でこの回は、広島市民球場での野球観戦といった観光的側面もプログラムに含まれている。先に述べた通り、現在は広島女学院大学学生である実行委員によってプログラムが構成され、運営がなされているが、2000年の開始当初は教員によるプログラム構成、運営がなされており、広島女学院大学からの学生は参加者としてさえ、一人も参加していなかった。

第2回(2001年)には、いくつかの変化が見られる。まずは前年のような2泊3日での開催ではなく、5日～

6日の1泊2日で行われるようになったことである。この日程は第11回まで続いた。次に、第1回では広島女学院の教職員によって進められた本プログラムが、この年から学生の責任者が立てられ、第1回にはなかった手作りのしおりと報告書が作られている。しおりには、ヒロシマや原爆についての説明文や案内文が日本語と英文で書かれている他、それぞれの参加校を紹介するページなど、多様な地域からの参加者がヒロシマを理解できるような工夫や、また参加者が互いのことを知ろうとする工夫が随所に見られる。さらに日程的にも時間が限られていたからであろう、プログラム内に観光や娯楽的な要素は一切見られなくなった。

「8.6 平和学習プログラム実行委員」の名がしおりに見られるようになったのは翌第3回(2002年)からである。プログラム自体は5日～6日の1泊2日で行われており、内容も2回目とほぼ同じである。異なる点は、しおりが挨拶、スケジュール、被爆証言の講師紹介のみの3点のみ記された、非常にシンプルなものになっていることである。

第4回(2003年)、第5回(2004年)はいずれも1泊2日、プログラム内容も第3回と同様であった。

しかし第6回(2005年)にはプログラムの流れに小さいながらも重要な変化が見られる。それはプログラムに

表1 参加者数と参加大学数

	西暦(年)	参加者数(名)	参加校数(校)	
第1回	2000	9	4	教職員による計画・開催
第2回	2001	29	7	学生がプログラムの運営に関わり始める
第3回	2002	15	6	
第4回	2003	22	7	
第5回	2004	29	7	参加費の徴収開始
第6回	2005	34	6	
第7回	2006	24	8	礼拝形式の開会礼拝が始まる
第8回	2007	41	8	
第9回	2008	38	6	
第10回	2009	43	7	朗読劇『夏雲は忘れない』の上演開始、開会式・閉会式が開会礼拝・閉会礼拝となる
第11回	2010	30	8	
第12回	2011	29	4	日程を2泊3日に延長
第13回	2012	26	7	
第14回	2013	38	7	
第15回	2014	47	10	

ディスカッションを初めて取り入れたことである。この年も1泊2日の日程でありながら、6日すなわちプログラム最終日の午後から、1時間半の「グループディスカッション」と1時間の「各グループ報告・全体討議」の時間がとられている。

第7回（2006年）もスケジュールの流れは第6回と同じであるが、この回からしおりの中には「開会行事」の中に「黙想」「讃美歌 312番 いつくしみ深き」「聖書・祈祷」と記され、次ページには讃美歌の楽譜のコピーも見られるようになった。先に述べた通り、キリスト教主義大学を中心に行われている本プログラムのこのような点は、他の団体が行っている平和学習と大きく異なる点である。

第8回（2007年）、第9回（2008年）のスケジュールは第7回と同じである。

第10回（2009年）に初めてプログラム内に「礼拝」の文字が見られるようになる。すなわち「開会礼拝」で始まり「閉会礼拝」で終わるようになる。また実行委員による朗読劇『夏雲は忘れない』もこの回から始まる。

第11回（2010年）はこれまでのプログラムに加え、実行委員によるピーススタディーツアーの報告が行われ始めた。ピーススタディーツアーとは、本プログラム実行委員を中心に、学生に広く呼びかけて行われる平和研修旅行である。開催時期は毎年3月で、隔年で長崎を訪れるほか、これまでに人間魚雷回天の吉があった山口県周南市の大津島や、戦時中に毒ガスが製造され、秘密保持のため地図から消されていた時期もある広島県竹原市の大久野島などが目的地となった。こういった研修の報告が本プログラムに加えられたことは、ヒロシマの原爆だけに焦点を当てるのではなく、参加者に向けて広く平和について考えるきっかけを提供する機会になっていると言える。

第12回（2011年）からは日程を2泊3日に延長し、その分ディスカッション後のプレゼンテーションへの時間を大幅に増やした。ディスカッションとプレゼンテーションにはほぼ1日を費やすことで、参加者が主体的に平和について考える機会となっている。また、6日の夜に灯籠流しを見るために、夕刻再び平和記念公園へ行くことを始めた。

なおこの年は、この8.6平和学習プログラムの取り組みが評価され、財団法人学生サポートセンターより表彰を受けている。

第13回（2012年）、第14回（2013年）のスケジュールは第12回と同じである。しかしプログラムには記載されていないが、14回は開会礼拝時にグループごとに提出され

た祈りの言葉をつなぎ、皆で共に祈った。各グループから寄せられた祈りの言葉をつむぎあわせ、一同でともに礼拝の中で祈るように整えて下さったのは、学生を引率して参加して下さった松山東雲女子大学宗教主事である山本有紀准教授のご尽力である。

この回の特徴として、実行委員の働きに、より一層学生主体であるという意識が強くなったように見受けられる場面があったことである。また、第14回のしおりの構成は13回目とほぼ変わりはないが、朗読劇『夏雲は忘れない』についての説明や、劇中に出てくる単語のワードリストが加わり、現代の日常生活ではあまり使われない「緋のもんぺ」や「鴨居」など、現代の大学生に馴染みのないものをはじめ、おそらく参加者が劇を見ながらも理解できないであろう言葉や、戦時中の持ち物や食べ物、広島の名地名などの説明が付け加えられている。

第15回目（2014年）もプログラムの流れに大きな変化はない。しかし、これまでゲーンスタチャペルで行っていた朗読劇を、照明の使えるアッセンブリーホールに移して演じ、照明や音響（原爆投下時の爆発音のみ）、エノラゲイ号や、原爆投下後の焼け野原となったヒロシマの写真の背景に写し出した。また、ステージに上がって演じる実行委員は、白いブラウスにもんぺを履き、当時の女学生の格好を意識して演じた。さらに、ある実行委員の発案によって、これまで演じられてきた台本に、峠三吉の「にんげんをかえせ」や、朗読劇『夏雲は忘れない』の編集者であり演劇者である土屋時子氏（元広島女学院大学図書課長）作の詩『名前』を劇中に盛り込んだ。また、練習に土屋時子氏をお招きし、朗読劇のために必要な心得を学んだ。具体的には、当時どのような状況の中でこれらの言葉が語られていたのか、セリフの背景を知ることの重要性についてお話をくださった。そのため実行委員は、それぞれ戦争に関する知識を積み、セリフを自らのものにしようと努力した。その結果、本番で思わず涙をこぼしながらセリフを語った実行委員もいるほどであった。

このように概観してみると、8.6平和学習プログラムが開始した当初のプログラムを残しつつ、より一層充実するために、新たなプログラムが徐々につけ加えられてきた様子がわかる。また、開会式／閉会式が名実ともに開会礼拝／閉会礼拝に変更されたり、しおりに聖書や讃美歌が印刷されるようになったり、礼拝で用いる聖書と讃美歌を実行委員の学生が決めるようになるなど、実行委員の中で、この8.6平和学習プログラムがキリスト教主義大学によって行われているものであるという意識が強くなっているように思われる。

3. 8.6 平和学習プログラム参加による意識変化調査

第15回「8.6 平和学習プログラム」の県外参加者の感想をまとめ、効果的な平和学習を考察するため以下の手順でアンケート調査を実施した。

(1) 調査方法

「事後アンケート」を解散時に各校の代表者に渡し、後日投函してもらうよう依頼した。

県外参加者37名、回収19枚。

(2) 調査内容

1) 調査は自記式アンケートにより実施した。

2) 質問事項

- ①プログラム前後で心境の変化はありましたか？
- ②それはどのような変化でしたか？
- ③印象に残ったプログラムを上位3位まで教えてください。
- ④衝撃を受けたプログラムを上位3位まで教えてください。
- ⑤自由記述

4. 結果と考察

1) プログラムの前後で心境の変化はありましたか？

表2 プログラム前後の心境の変化

はい (名)	いいえ (名)	未記入 (名)
15	1	3

参加者の圧倒的多数が、「8.6 平和学習プログラム」参加によって心境の変化があったことが分かる。

2) それはどのような変化でしたか？

表3 心境の変化の具体的内容

変 化	人数 (名)
平和への思い	6
現在の日常の幸福感を強く感じる	2
現在の社会問題へとつながった	2
行動する大切さ	2
原子力の恐ろしさ	1
現在の日本の危うさ	1
他人事ではなく自分の問題としてヒロシマについて考えることが出来るようになった	1
式典参加者の態度	1
平和はみんなの力で作っていくものであるという気づき	1
戦争に対する気持ち	1
生命の大切さを感じた	1
自分の考え方が広がった	1

表3の結果からは、平和や戦争について意識に変化が見られただけでなく、現在の生活や問題について考えが広がりを見せていることが分かる。

論者は、平和学習の中で戦争の悲惨さによって受ける衝撃と、このプログラム全体を通して得られた感情や記憶に残るものが必ずしも一致しないのではないかと仮定し、次に「印象に残ったプログラムについて問うた、以下がその結果である。

3) 印象に残ったプログラムを上位3位まで教えてください。

表4 印象に残ったプログラム

1 番 印象に残った プログラム	グループディスカッション	8
	ポスターセッション	4
	広島平和記念式典	3
	朗読劇『夏雲は忘れない』	2
	平和資料館見学	1
	とうろう流し	1
	ポスターセッション準備	1
	被爆証言	1
2 番目に 印象に残った プログラム	とうろう流し	5
	広島平和記念式典	4
	グループディスカッション	2
	平和資料館見学	2
	碑めぐり	2
	ダイ・イン	1
	被爆証言	1
	From America to Hiroshima ^{注2)}	1
3 番目に 印象に残った プログラム	平和記念式典	4
	朗読劇『夏雲は忘れない』	3
	とうろう流し	2
	ポスターセッション	2
	碑めぐり	2
	被爆証言	1
	お好み焼き	1
	From America to Hiroshima	1
	開会礼拝	1
	閉会礼拝	1

4) 衝撃を受けたプログラムを上位3位まで教えてください。

表5 衝撃を受けたプログラム

1番 衝撃を受けた プログラム	平和資料館見学	6
	広島平和記念式典（周辺のデモ）	4
	被爆証言	4
	グループディスカッション	1
	とうろう流し	1
	碑めぐり	1
	国立広島原爆死没者追悼平和祈念館	1
	8月6日の人の多さ	1
	女学院中高の式典	1
2番目に 衝撃を受けた プログラム	朗読劇『夏雲は忘れない』	3
	平和資料館見学	2
	碑めぐり	2
	被爆証言	2
	広島平和記念式典	2
	原爆ドーム	2
	とうろう流し	1
	ポスターセッション	1
	式典時の警察の多さ	1
From America to Hiroshima	1	
3番目に 衝撃を受けた プログラム	碑めぐり	4
	広島平和記念式典（周辺のデモ）	3
	被爆証言	2
	とうろう流し	2
	From America to Hiroshima	2
	朗読劇『夏雲は忘れない』	2
	平和資料館見学	1

この結果が示すのは、衝撃を受けたものはやはり強烈な直接体験である資料館見学や、平和公園での情景、被爆証言そして朗読劇などである一方で、印象に残ったものはグループディスカッションやプレゼンテーションといった自発的な学びの経験であり、また、とうろう流しのような静かな情緒的体験であるということである。

4. まとめ 平和教育のこれからとキリスト教主義
平和教育の可能性

前項での調査結果は、本プログラムで平和資料館の展

示や被爆証言から学んだ内容が、学習者に定着するにあたって、グループディスカッションやプレゼンテーションといった自発的な学びの経験が重要な役割を果たしている可能性を示している。このことについては、より詳しくかつ継続的な調査を経なければ断言できないが、今日大学教育の現場で「アクティブ・ラーニング」という参加型・自己獲得的な授業実践の成果が大きく注目を集めていることもとも整合する。前述のように本プログラムは当初から、ヒロシマを「肌で感じる」ことを大切に営まれてきた。そのために平和資料館見学や、8.6の朝の体験、そして被爆証言は欠かすことのできない重要な要素と位置づけられてきた。しかし、第6回（2005年）におけるディスカッションの取り入れと、第12回（2011年）におけるその拡充は、本プログラムにおける参加者の学習プロセスに大きな変化をもたらしたのである。それらは「肌で感じる」体験を自らの学習体験として深化・定着させるうえで極めて重要な役割を果たしていると考えられる。

冒頭に述べたように、平和教育が転換点を迎えるなか、広島市は現在、被爆体験の風化を防ぎ、平和を創造していくために、「被爆の実相や被爆体験の意味を、次代を担う世代へ継承していくことが重要かつ緊急の課題となっている」として、「被爆体験継承推進プログラム」を展開している³⁾。この取り組みの中で広島市は、「若い世代への継承事業」と位置付けて（1）平和学習の強化（市民局と教育委員会の取組の相互強化や被爆体験証言）、（2）修学旅行の誘致・支援、（3）サダコ・折り鶴の活用、（4）被爆建物・樹木の活用、（5）被爆体験の学問的整理の5点、また、「継承の基礎づくり事業」として、（1）被爆資料等の調査収集・整理、（2）被爆体験のデジタル化、（3）民間の活動との連携を挙げている。

この中でも、被爆建物・樹木や記念碑などを用いた間接的な証言活動や、被爆証言のデジタル・アーカイブ化^{注3)}は、被爆証言者の高齢化や減少という課題に対する一つの有効な解決となりえよう。それらから得られる経験はやはり間接的なものにとどまるが、しかし、ディスカッションやプレゼンテーションと有機的に組み合わせることで、これらの体験を学習者にとって直接的な学習経験とすることは可能なのではないかと。

また、広島女学院大学の8.6平和学習プログラムを特長づける「礼拝」が平和学習経験に与える影響についても触れておきたい。これまでの本プログラムにおけるディスカッションやプレゼンテーションの質疑応答では、当然ながら意見がぶつかり合う場面が見られることがあった。それぞれが真摯で熱い思いをもてばこそ、意

見の対立も生じるのである。この対立をどのように昇華していくかという試行錯誤も、平和を実践することの難しさや喜びを体験する重要なプロセスである。本プログラムにおいて論者が経験したのは、閉会礼拝における参加者相互の和解と平和の創造という場面であった。閉会礼拝で祈りの言葉を合わせ、心を合わせ、声を合わせ、手を取り合って祈りを捧げたり賛美歌を歌う経験は、3日間を通して平和をついて考えてきた者にとって、平和を肌で感じられる時間であると論者は考える。アンケートには表れていないことではあるが、「自分とは違った人間が集まり、他者と共に何かに取り組み作業を通して、知識ではない平和を体感することが出来た」という感想や、「これからの生き方に変化が生じた」という意見も実際に参加者から聞くことができた。これらの意見からは、礼拝という営みが、3日間のプログラムを通して学んだこと、考えたこと、感じたことを学習者の中に体験的に統合するプロセスに大きな意味を持っていることが見通される。

注

- 1) 終戦60年目の2005年から始められている影絵展。テーマは毎年被爆者への取材を元に考えられ、広島市内の中学

生、高校生、大学生を中心に作成し、毎年8月5、6日に元安橋の袂にて野外展示を行っている。またその後は年間を通して市内を巡回展示している。

- 2) ローグ・バレー合唱団の指揮者デイブ・マーストン氏作詞作曲の歌のタイトル。「私はその時にまだ生まれていなかったけれども、From America to Hiroshima お許しを I'm so sorry.」と歌っている。もともと聖和大学入学式で原爆反対についてマーストン一家がこの歌ったことをきっかけにして、西垣の紹介により2014年8月6日広島女学院で歌を披露して下さった。
- 3) この分野での先駆的な取り組みのひとつとして、首都大学東京と広島女学院中高などが制作した「ヒロシマ・アーカイブス」(<http://hiroshima.mapping.jp/member.html>)がある。

引用文献

- 1) 広島平和教育研究所、「『平和教育実態調査』まとめ」、2004年11月29日更新。
- 2) 藤井敏彦、「平和教育」、芝田進午編『戦争と平和の理論』、pp. 247, 1992.
- 3) 広島市ホームページより「被爆体験継承推進プログラム」<http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/0000000000000/1247822744591/>〈2014年12月22日〉